

【報告・紹介】

未来を生きる人を創る

——千葉大ネットワーク Pro-SeeD の挑戦

千葉大ネットワーク Pro-SeeD 代表
吉川 亮

はじめに

—千葉大生が成長・挑戦できる環境を創りたい—

そんな想いで2006年4月に組織された『千葉大ネットワーク Pro-SeeD』。本稿では、その想いの背景から現在の活動、そしてこれからの展開や可能性について紹介したい。

1. 背景と動機

季節が夏に近づいてくると、電車の中や街中がスーツに身を包んだ学生で溢れかえる光景を毎年目にする。その頻度は夏が終わる頃に急激に増えはじめ、翌年の春まで続いていく。一様に同じ格好で、同じ方向を目指して歩いている彼らの姿に私は勝手に虚しさを感じていた。彼らの明確な未来が見えてこない、と。都内の大学に比べて先の光景を目にする時期がやや遅れる本学においては、私の感じる虚しさは同じどころか、むしろ増大する。同じキャンパスでともに頑張っていた友達が、目的も持たずに社会へと旅立たざるをえない状況に直面するからだ。

これからの社会はどうなってゆくのか—専門的なことはわからないが、しかし多くの学生や社会人と出会い、また耳にしてきたこと、目にしてきたことなどから感じている未来の道筋がある。それは、これからの日本人の幸福感につ

いてであり、「『自分の才能がいかに発揮され、他者へ貢献しているか』が未来の日本人の幸福感ではないか」ということである。

戦後数十年という時間をかけて、日本は何もない状況から経済大国へと成長してきた。経済が右肩上がりの環境で日本人が抱いてきた幸福感とは、「これだけ仕事をすれば洗濯機が手に入る、冷蔵庫が手に入る、テレビが手に入る」というものだったのではないだろうか。働けば確実に生活が豊かになった時代。その時代を引き継いだ我々学生の親の世代がその繁栄を維持しようと必死になっている姿を、子どもの頃に記憶している。「大企業に入れば、一生楽に暮らせる」「公務員は早く帰ることができて、給料がいい」「だから進学校に行って、いい大学に行きなさい」—働くことによって自分自身を豊かにし、働くことによって豊かになるシステムを、まさにゆりかごから墓場まで構築しようとしたといえる。そして今、親の守り抜きたかった繁栄は、遺構へと変化しようとしているように思える。それは、「同じ時代は永遠には続かない」という、歴史が教えてくれるごくごく当たり前の法則を考えれば当然のことである。

我々が子どもの頃には超優良と呼ばれた大企業は倒産した。景気悪化の影響を受けて、一生懸命働いてきた多くの労働者が解雇された。所得格差は広がり、しかしながら働かなくても生きていけるような状況も一部には存在する。テレビを手に入れることは、幸せとは言えなくなった。経済成長という共通の目標はとうに日本から消え失せたのである。この状況だからこそ、いやここまでの時代を築いてきた日本だからこそ、描ける未来があるのではないか。それが、『自分の才能が発揮され、他者へ貢献できる』社会の構築であると私は考えている。

さて、社会に出る手前の学生にとって、ここ1、2年の状況は一見好転しているようにも見える。いわゆる「売り手市場」である。有効求人倍率はバブル期を超えたという。しかしながら、バブル期はおろか今の学生においても、なぜ求人倍率が高いのか、なぜこの会社は採用数を増やしたのか、なぜ自分自身が採用されたのか、明確な答えを持たないのではないだろうか。生き残らなくてはいけない企業の論理によって造りだされた「売り手市場」という言葉に学

生は踊らされ、有利であるという客観的事実を武器に、明確な理由を持たないまま、良さそうに見える大企業への就職を目指して、その他の多くの企業からの内定を辞退している。事実、大企業を志望する学生の割合は増えてきているという。経済成長という単純な幸せへの目標を持たない現代人にとって、学生をそういった形で社会に送り出すことがよい選択とは思えない—それが私の感じる虚しさであった。

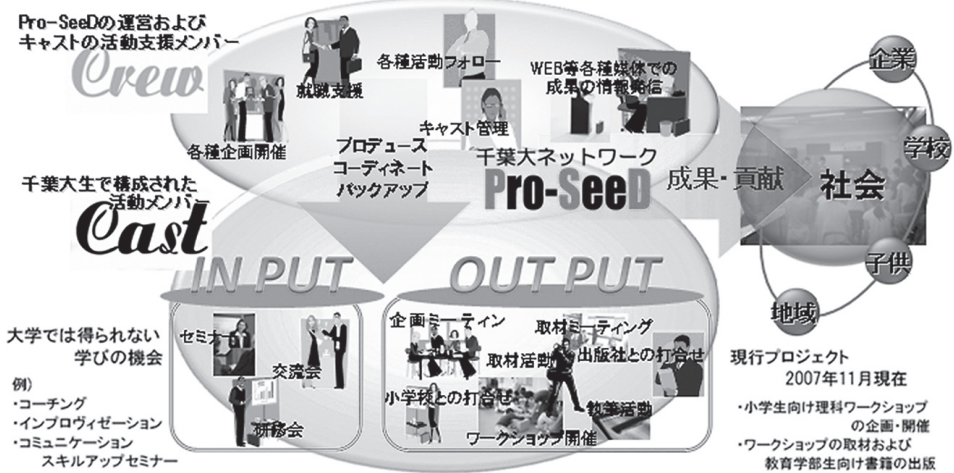
だからこそ、これから幸せに生きていくべき人にとって『才能が発揮され、貢献できる』という機会が必要なのではないだろうか。そして、それを学生の時代に体感し、その中で自然と湧き出る夢や幸せの目標に向かって突き進めるような「人財」を輩出していくことで、少しでもその未来に近づけるのではないか。千葉大生に『才能が発揮され、貢献できる』環境を提供すること、そして千葉だからこそできることを追求し、千葉大学の研究資源を活用した様々な価値を創出することを目的として誕生したのが千葉大ネットワーク Pro-SeeD である。

2. Pro-SeeD の活動

私たちの活動の概要は『千葉大生に成長・挑戦できる環境を提供し、社会に千葉大生だからこそ創造できる価値を提供する』ことである。活動する千葉大生を組織し、その活動をプロデュース、そしてバックアップする。発足から1年後の2007年4月には、千葉大学のベンチャービジネスラボラトリー内にオフィスを借りて活動するまでに至った。次頁に Pro-SeeD の活動の概略図を示す。

挑戦する千葉大生のことを、私たちは人生を豊かに演じるという意味を込めて「キャスト」と呼んでいる。キャストを組織し、より有意義な活動の機会を提供するために、キャストの管理や関係各所との調整や活動フォローを行っている。また、成果を出そうと挑戦するキャストに対して、インプットの場を用意している。たとえば自分が本当に望んでいることを探ってゆくコーチング¹

図 Pro-SeeD の活動の概略



や開けたコミュニケーション力の獲得を狙ったインプロヴィゼーション²を体験する機会を提供したり、社会人としての礼儀である名刺交換やメールマナーなどの講習会や実践の場を提供している。大学の講義ではなかなか体験できないような、活動に実践的に役立つコンテンツを企画している。キャストはその場で学んだことを直接活動で生かしたり確認したりすることができるため、より高い成果をあげることができ、またキャスト自身にとっても有益な学びの場

¹ 一般的には、クライアント（コーチングを受ける人）のモチベーションを高め、その人の能力を最大限発揮するためにコーチとの間で行われるコミュニケーションの技法の一つである。コーチングといっても様々な種類・手法があるが、私たちは主にCTI ジャパン (<http://www.thecoaches.co.jp/index.html>) のコーチの方からのバックアップを得ている。

² インプロヴィゼーション（即興）とは、「仲間と協力しながら、自分を最大限に使って、何が起るか分からない“瞬間”を生き、筋道の通ったストーリーを創造して」いくものであり、演劇界でトレーニングとして広く用いられている。小学生たちの予想外な言動に対して臨機応変に豊かなコミュニケーションを行うという点で、教師を目指す学生にふさわしいトレーニング方法であろう。（引用は impro works ホームページより。<http://www.impro-works.com/know.html>）

となることを期待している。

3. キャストの活動

理科ワークショッププロジェクト

千葉大生が成長・挑戦できる環境として、私たちがはじめに用意した場は小学校である。その内容は小学校の授業時間を使って、理科のワークショップを開催するというものである。

キャストには主に教育学部の学生と理系の学生を迎えた。教師を目指す教育学部生にとって、授業時間という実践の場は、自分が目指す先生像の確立のきっかけや先生として生きていく自覚を持つ機会である。また、理系の学生にとっては研究活動によって狭くなりがちな視野を広げ、科学の探求で得た知見を実際のカタチに変えて、実社会に貢献するという機会となる。また、両者の共同作業によりお互いの分野の理解を深めることによって自分の分野に生かすこともできる。

このプロジェクトは、とりわけ教師の卵たちが科学の楽しさに触れることによって、子どもの理科離れと、その原因である教師の理科離れという問題に対して大きな解決を果たすことができると期待している。また、千葉大学には毎年多くの教師を輩出している教育学部がある。そして、学部附属の小学校だけでなく近隣にも小学校が数多く存在する。学園都市としての西千葉の価値を生かしていくことができるプロジェクトでもあると考えている。

「授業」ではなく「ワークショップ」としているのは、小学生に理科の知識を教えるということではなく、体感をもって科学のエッセンスを伝えていくことに主眼を置きたかったためだ。キャストが定期的にミーティングを行い、「空気砲」を題材に企画している。空気砲とは、ダンボールに穴をあけて叩くと空気が勢いよくまっすぐ飛び出してくるおもちゃである。理系学生と教育学部の学生が一緒になって実験を行い、そこで得られた科学の面白さ、不思議さなどをいかに小学生に伝え、いかに興味や関心、納得を引き出すかにいたるまで考

え抜いていく。

実際のワークショップ（写真 1、2、3）では、彼らが試行錯誤を重ねた末の、空気砲から煙の輪を飛び出させるデモンストレーションを見て、小学生が「すごおい！」と感動してきらきらと目を輝かせていた。ワークショップの内容に関心を持った何人かの子どもたちは、夏休みの自由研究で空気砲について考察を発展させていた。また、いくつかのクラスでは文化祭での発表として空気砲を取り上げた³ほどに、キャストが子どもたちに与えた影響は大きい。さらに、すでにワークショップを開催したクラスに対して、前回の内容を発展させた新たなワークショップを開催するという試み⁴も実行された。

簡単そうに見え、また単純そうに見えるこの空気砲であるが、キャストたちは様々な議論や実験、ワークショップの開催といった実体験を通して、それがいかに可能性に満ちたものであるかを、まさに体を通じて実感していったようである。そして自分たちが創り上げたものが、実際に子どもたちの興味関心を育んでいる様を目にする機会を得て、ますます彼らは生き生きと活動するようになった。

私たちは物品の購入や授業時間の確保など具体的なセッティングをする。2007 年度は 11 月現在で 7 回開催し、ワークショップ開催の依頼も自然と出てくるようになってきており、これからますます小学校との強い関係構築が期待できる。今後新しいテーマのワークショップの開発⁵や中学校や高校、地域施設での実施、さらに親子ネットワークの構築などへの展開を見据え、今年度はしっかりとワークショップ開催の環境を整備していく予定である。

³ 千葉大学教育学部附属小学校で 2007 年 10 月 28 日に開催された文化祭において、4 年 2 組と 3 組が空気砲をテーマとした発表を行った。

⁴ 空気砲ワークショップ第 2 弾は空気砲の不思議を身体で体感しながら理解していく構成で、普通の授業では展開できない内容として小学校の先生方からも好評であった。

⁵ すでに企画のアイディア自体は候補が挙がっており、ワークショップとしての開発がスタートする。



写真1



写真2



写真3

編集・出版プロジェクト

もうひとつの柱としてキャストが取り組んでいる活動が出版活動である。千葉大学やその学生、また地域についての情報を学生が社会に発信していくというひとつの流れを作っていこうと考えた。情報網が格段に増大し、情報が氾濫している現代において、乾いた情報ではなく、そこに密接に関わっている立場の人間から見た、生き生きとした情報を発信することは、受信する側にとっても有益なのではないだろうか。だからこそ、千葉大学にいる学生に、本当の千葉大学を発信してほしいと創られたプロジェクトである。

現在進行中の活動は、主に教育学部生や教育の現場を志す者に対して、ひとつの提案をする書籍の出版である。学生だからこそ表現できることを意識して、同じキャストが企画する理科ワークショップの取材や、キャストをはじめ教育学部生へのインタビューや座談会、また地域の小学校の先生などへのインタビューなどを通して、教育学の専門家では表現できない、より現場に密着した内容の書籍を目指している。

現在、学部を問わず出版に関心のある学生がキャストとして活動している。実際の市場流通に乗せる書籍を作る作業というのは何もかもが初めてであり、インタビューの仕方から本の内容の決め方まで、全てが暗中模索である。学生ならではの視点を生かしつつ、学生気分では通用しない社会人としての責任感の重さを学びながら奮闘している。

キャストインタビュー

これらの活動についてプロジェクトのリーダーである学生のそれぞれの意見を紹介する。

●インタビューアー 吉川亮（筆者。以下「吉」と表記）

●理科ワークショップチーム キャストリーダー 八木ヶ谷舞さん 教育学部
小学校教員養成課程（以下「八」と表記）

吉「最初はどのような想いで入ってきたのかな？」

八「入ったときは2年生の夏で、ボランティアもやってないし、教育実習を前にしていた時期で教師になるために何かやらなくちゃと思っていました。」

吉「活動していて気づいたところとか、役に立っていることはある？」

八「授業作りができるし、実際に小学校で児童と接触できるから良い経験になっています。授業を作っていると、頭に描いている子どもと実際の子どもは違ったりするし、複数の小学校やそれ以外の場所⁶でやると、そこでも子どもの反応が違うことが実感できます。そのようなことは本を読んだりして、頭では理解していても、その状況を体感してみると自分の意思や関わり方が全く違ってきました。」

吉「他にはどう？」

八「空気砲のワークショップを企画する中で子どもたちに遊んでもらう時間についてその内容を一生懸命考えたけど、実際、子どもたちは私たちが用意していない、想像を超えた遊びを考えつく。それもワークショップをやってみたからこそ子どもの可能性を感じることができたわけですね。」

吉「名前を書かせるために持たせたマジックで空気砲に絵を描いちゃったりして時間が足りなくなったりね（笑）。」

八「マジックを使う機会というのは、今まで子どもにとっては絵を描く機会ではなかったんじゃないでしょうか。だから持っただけで喜んで描いちゃったのかも。それが鉛筆だったら別の展開になっていたかもしれない。マジックにはそんな意味があるなんてやる前は考えられなくて、ただこちらの都合で考えていたけど、今は様々な角度から考えられるようになりましたね。こうしたら、どうなるんだろう⁷って。」

吉「教育実習との絡みでワークショップはどうなのかな？」

⁶ 小学校での開催だけでなく地域の施設で他学年の子供や親子を対象に開催している。

⁷ インタビュー内では触れられていないが、空気砲を作製する手順をひとつ変えるだけで、子どもたちの行動は全く変わってくる。

八「授業は児童の反応を予想立てて組み立てて流れを作っていないと成り立たないので、その想像する意識はワークショップで養われたと思います。一度、教壇にたつような経験ができただけで塾講師をやったことのない私にも自信ができました。」

吉「これから考えている活動のイメージは？」

八「はじめは空気砲ひとつでどこまで広げられるのか心配だったけど、いろいろな人が関わっていく中で見る視点を変えれば新しいことも表現できる。先生は時間が無いのだから、一から作るだけでなく今あるものについて視点を変えて授業をやっていく必要もある。空気砲も第2弾のワークショップを行うことができるようになってきて、自由度が増しているのだからさらに視点を広げて可能性を追求したいと思っています。空気砲をダンボールで作らなくてもいいわけだし…。」

吉「どういう活動にしていきたいかな？」

八「1年生や2年生で、あまり教育に対して活動をしていない学生にもこの環境を提供できたらいいんじゃないかなと。あとはワークショップは今のところ1時間完結でしかなくてバタバタしてしまうところもあるけど、複数時間の前提の下に1時間まるまる考える時間を作りたいです。附属小があって、こういったことを受け入れてくれる環境が千葉大学はいいですよ。こういう活動があるから千葉大の教育学部に入りたいと受験生に思ってもらえるようになればいいと思います。」

吉「千葉大学だからこそできることになっていくよね。これが受験生まで浸透して意味を持って千葉大学を受験してくる生徒がいれば、千葉の教育やひいては千葉にとって意味のある活動になるかもしれないよね。ただの空気砲から多くの可能性が引き出せたように、活動自体にも可能性をどんどん見出しながら、お互いひとつひとつ積み重ねていきましょう。」

八「はい、頑張りましょう。」

●編集・出版チーム キャストリーダー 相原淳一さん 法経学部経済学科
（以下「相」と表記）

吉「キャストに興味を持ったきっかけは？」

相「とある講義でアナウンスされたのがきっかけで、もともとマスコミに興味を持っていたし、書籍として外に出せるのであれば面白いなど。あまり社会との接点が無かったので、出版社などの企業や社会との関わりが持てたら自分にとって意義があるんじゃないかなと思いました。」

吉「活動していて有意義なことは？」

相「例えば細かいことですがメールには必ず件名を入れる必要があると言われて、これは遊びじゃないなと実感しました。今、他の分野でもしっかりとした文章を書くことも増えてきましたが、自覚をもつきっかけになりました。」

吉「他にはどうだろう？」

相「ワークショップや教育学部生への取材だったり、またインプロ、座談会の運営やインタビューといった体感したことの無かった機会や活動、知り合うことのなかった教育学部生などとの出会いは僕にとっては大きかったですね。座談会に出るなら簡単ですけど、座談会をセッティングしたり興味深い話を引き出す側になると、考えなくてはいけないことも多いわけです。その難しさは“言うは易し”ですが（笑）。でもやらなきゃいけない。やらなきゃいけないです！」

吉「今後に向けて考えていることは？」

相「自分の研究を世に出したいという気持ちもあるんですが、教授には『大学の中ではできない』なんて言われちゃったりしています。でもゆくゆくは、自分が描いていることも一つの形として表現したいと思っているし、この書籍化を達成した後、またどこに続いていくかなと考えていたりします。自分の主張をもっと外に表現できたらなと。」

吉「この取材、出版チームは、今はワークショップや教育というものに目を向

けて、キャストなりに表現していくという形だけど、このハードルを乗り越えた先に、いろいろな表現をしていく集団としてさらに高いハードルへ挑戦していくことができればいいよね。」

キャストの活動について、実際に活動しているキャストの意見を紹介した。話題に上らなかったことの中でも、私がキャストと接して思うことは、例えばキャスト同士で議論をする場合、話すことを主観的に捉えているだけで、受け手になかなか理解されないような場面が少なからずある。これは一般の学生にとっては見過ごされがちなことであるが、それでは成果をあげたり、他者へ貢献することができないし、社会では通用しない。だからこそ、この環境で自らそれに気づき、他者の存在を意識して自分を高められることができれば、才能や適性といった身近な将来選択のために必要な気づきの獲得、そして最終的には彼らのやりたいこと、目指すものに近づいていけるのではないだろうか。繰り返しになるが、私たちが意識していることはキャストに『成果を出すこと』、『貢献すること』を意識して活動させることである。その過程においてこそ、活動中でのあらゆる事象からより成長できる糧を掴み取ることができるからで、その意識を高めるために活動の意義を納得してもらった上でキャストとして迎え入れている。2007年11月現在、合わせて11名のキャストを迎えているが、皆忙しいながらも頑張っている学生である。この活動で得られた特別な経験が彼らの将来を明るくすることを願ってやまない。

4. 今後の展望

これまで、主にキャストについて言及してきたが、キャストの活動によって様々な価値を生み出していきたいという願いも私たちは持っている。また、学生だけでなく幅広く千葉大学が持つ研究資源を最大限生かした価値を千葉という地域に与えていきたいと思っている。意欲、才能溢れるキャストが自分自身の夢に向かうための進路選択をコーディネートし、企業の人材採用への新たな

提案にも取り組もうと考えている。また、今後は社会に出てOB・OGとなったキャストと学生を繋いで新たな価値を生み出すこともできるだろう。組織の整備だけでなく、数年後にはNGN⁸といった次世代通信網など、インフラをより整備して有機的な繋がりが持てる環境を作ることができると期待している。

私たちは教育というテーマで活動をスタートしたが、出版活動でも生き生きとした情報を扱うメディアの創造を目指しており、さらにこれから数十年かけて多くのテーマに取り組みたいという意欲がある。現在計画しているテーマや具体的なプロジェクトの全てに共通しているのは、私たちやキャスト、そしてすべてのステークホルダーが互いにその力を高めあうシステムの構築ということである。それは言い換えれば有機的な「コミュニケーション」による価値の創造ということである。現在取り組んでいる「教育」という分野はまさに子どもという他者をいかに導いていくかということが問題であり、この分野はこれからの社会にとってもっとも重要なもののひとつである。メディアにおける情報のやり取りは密になればコミュニケーションと言えるし、受け手側をいかようにも導けてしまう存在である。それだけでなく、例えば今後の「医療」という分野では物理的な病気の殲滅以外に人を幸せに導く可能性があるように思える。また「スポーツ」においていかに持っている才能を引き出すかということは技術的な指導だけではないだろうし、一流選手ではなく一般市民が楽しみ幸せを享受するスポーツとしてのこれからの発展を考えるのであれば尚更である。これら様々な分野の発展に対して大学生をはじめとした大学の研究資源や地域資源を活用し得るアプローチの可能性を模索し、ひとつずつ実現させていきたい。

私たちも価値を享受する立場の存在を意識し、キャストとうまくコミュニケーションして組織していかななくてはいけない。まだ始まったばかりであり、私た

⁸ Next Generation Network。既存の電話網を代替する次世代IPネットワーク。例えば、教師になったキャストOBが学校にいながら、現役キャストと音声だけでなく映像なども交えた会議や討論ができるようになる。

ちとしても手探りで進んでいる状況であるが、いろいろな経験を糧にキャストとともにひとつずつ確実に歩んでいきたいと思っている。その果てに千葉だからこそ、日本だからこそ表現できる新たな未来を構築していきたい。

千葉大ネットワーク Pro-SeeD

〒 263-8522 千葉市稲毛区弥生町 1-33

千葉大学ベンチャービジネスラボラトリー 3 階

TEL 043-290-3994

HP <http://www.future-access.com/pro-seed/>

(よしかわ・りょう)

(2007 年 11 月 14 日受理)